県道須磨園南原曽根線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告

長畑遺跡群II地区

福岡県文化財調査報告書　第246集

2014

九州歴史資料館

序

福岡県教育委員会では、県道須磨園南原曽根線道路改良事業に伴い、京都郡苅田町大字提に所在する長畑遺跡群の発掘調査を実施しました。

この発掘調査によって、弥生時代や中世の遺構・遺物が見つかり、当地域の歴史の一端を垣間見る貴重な成果を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、地域文化の普及啓発や学術研究の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査および報告書作成にあたり、ご協力をいただいた方々に厚く感謝いたします。

平成26年３月31日

九州歴史資料館
館長　荒巻　俊彦

例　言

1　本書は、県道須磨園南原曽根線道路改良事業に伴い平成17年度に福岡県教育委員会が実施した、長畑（NAGAHATA）遺跡群の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は福岡県土木部（現県土整備部）道路建設課の執行委任を受け、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施した。報告書作成は福岡県県土整備部道路建設課の執行委任を受け、九州歴史資料館が実施した。

3　本書に掲載した遺構写真の撮影は調査担当者の吉田東明が、遺物写真の撮影は北岡伸一が行った。

4　本書に掲載した遺構図の作成は、渡辺万里子・吉留ますみの協力を得て吉田が行った。

5　出土遺物の水洗、復元、実測、浄書作業は、調査担当者ならびに九州歴史資料館で実施した。

6　出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7　本書に使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「苅田」を改変したものである。本書で使用する方位は、国土座標Ⅱ系による座標北である。

8　本書の執筆・編集は吉田が行った。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 1
　1　調査に至る経緯 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査・整理関係者 …… 1

Ⅱ　位置と環境 …… 3
　1　地理的環境 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3

Ⅲ　発掘調査の記録 …… 5
　1　遺跡の概要 …… 5
　2　基本層序 …… 5
　3　遺構と遺物 …… 6

Ⅳ　まとめ …… 11

図　版　目　次

図版１　１．長畑遺跡群Ⅱ地区全景（北から）
２．基本土層（南から）
３．１号竪穴（北から）
図版２　１．１号竪穴焼土検出状況（北から）
２．１号土坑（東から）
３．２号土坑（西から）
図版３　１．３号土坑（東から）
２．４号土坑（北から）
図版４　１．出土遺物①
２．出土遺物②
３．出土遺物③

挿　図　目　次

第１図　苅田町位置図…… 3
第２図　周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 4
第３図　基本土層図（1/30）…… 5
第４図　調査区位置図（1/1,000）…… 5
第５図　長畑遺跡群Ⅱ地区　遺構配置図（1/150）…… 6
第６図　１号竪穴実測図（1/60）…… 7
第７図　土坑実測図（1/30）…… 8
第８図　出土遺物実測図（1/3）…… 9

Ⅰ　はじめに

１　調査に至る経緯

福岡県道254号須磨園南原曽根線は、北九州市小倉南区曽根から苅田町南原を経由して行橋市須磨園を結ぶ県道である。その路線はカルスト台地平尾台や水晶山が連なる貫山地の山麓を巡るように続き、特に北九州市、苅田町域は宅地の中を通り、また国道10号の抜け道としても利用されるために交通量は多く、かねてから路線拡幅事業が進められてきた。

今回発掘調査の対象となった区域が、事業主体である行橋土木事務所（現京築県土整備事務所）都市施設整備課から埋蔵文化財の有無について協議があり、福岡県教育庁京築教育事務所の文化財担当が確認調査を実施したのは、平成15年５月23日である。その結果、今回報告する範囲に中世を中心とする時期の遺跡が存在することが判り、当区域施工の前に記録保存による発掘調査が必要である旨、回答を行った。

平成16年度にも周辺域の施工区域の試掘・確認調査を実施したが遺跡の存在は確認されず、調査の範囲を確定し、執行委任の事務手続き等を経て実際に調査に着手したのは平成17年６月である。なお、遺跡名については苅田町教育委員会と協議の末、「長畑遺跡群Ⅱ地区」とすることとなった。

２　調査の経過

平成17年６月６日、午前中から重機を搬入して表土掘削を開始した。同日中に発掘器材を搬入し、併せて周辺域の環境整備等を行った。翌７日には表土掘削も終了し、重機を搬出。作業員による遺構確認作業を北端から開始した。８日に測量杭の設置とレベルの移動を実施、併せて遺構確認、遺構掘削作業を進めた。９日も遺構確認、掘削を進めながら、１～３号土坑の個別実測図作成、基本土層図作成を行った。10日には全ての遺構掘削が終了し、１～４号土坑の写真撮影、全景写真撮影、及び遺構の実測作業を進めた。当日中に遺構実測作業も全て完了し、翌週の６月13日には発掘機材を撤収、再度重機を搬入して埋め戻しを行い、発掘現場での作業を全て完了した。

３　調査・整理関係者

平成17年度の発掘調査関係者および平成25年度の整理作業関係者は以下のとおりである。

福岡県教育委員会

	平成17年度	平成25年度
総括		
教育長	森山　良一	杉光　誠
教育次長	清水　圭輔	城戸　秀明
総務部長	中原　一憲	西牟田龍治
文化財保護課		
課長	久芳　昭文	伊崎　俊秋

副課長　川述　昭人
参事兼課長補佐　安川　正郷
参事兼課長技術補佐　木下　修
池辺　元明
参事　新原　正典
課長補佐　高田　政司

調査

文化財保護課
参事補佐兼調査第一係長　小池　史哲
京築教育事務所（文化財保護課兼務）　吉田　東明

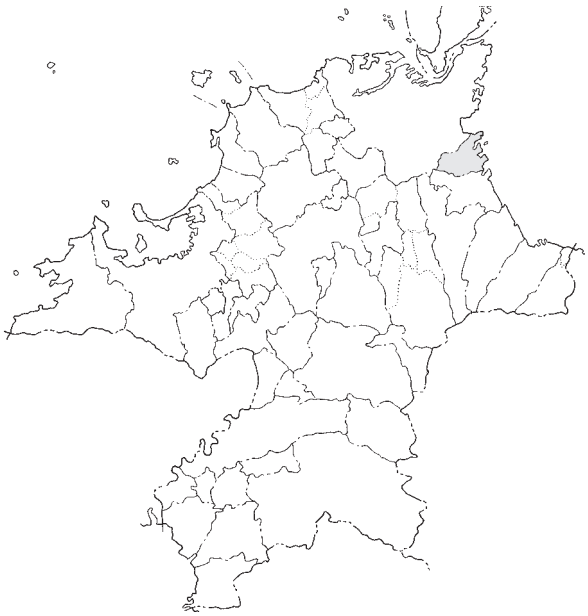
整理・報告書作成

九州歴史資料館
館長　荒巻　俊彦
副館長　篠田　隆行
参事（文化財調査室長）　飛野　博文
文化財保護課
企画係長（九州歴史資料館兼務）　吉田　東明（整理・報告書作成）

なお、発掘調査および整理作業にあたり、ご理解・ご協力いただいた関係各位に厚く感謝申し上げます。

II　位置と環境

1　地理的環境（第１図）



第１図　苅田町位置図

長畑遺跡群が所在する福岡県京都郡苅田町は、福岡県の北東部に位置し、人口約３万６千人、面積約46.6k㎡の町である。北は政令都市北九州市、南は行橋市に接し、東側には周防灘に面しており、国際貿易港である苅田港と広大な臨海工業地帯、苅田港沖にある北九州空港、近年早急に建設が進む東九州自動車道等、商工業の一大拠点として、また陸海空の交通の結節点として都市化が進む町である。一方、西はカルスト台地平尾台に連なり、国指定天然記念物の青龍窟や広谷湿原など豊かな自然にも恵まれ、豊前国英彦山六峰の一つである普智山等覚寺では国指定重要無形文化財の等覚寺の松会が今なお伝承され、市街地には国指定史跡の石塚山古墳や御所山古墳など重要な遺跡が点在する等、自然や歴史にも恵まれた側面も併せ持った町である。

長畑遺跡群が立地する地形は、町西部に広がるカルスト台地平尾台から東側に派生した緩斜面の裾部にあり、段丘堆積物層によって形成された中位平坦面に当たる。古くから居住空間としては適地であったようで、周辺域には遺跡が多数存在し、今もなお宅地化が進む地域である。

2　歴史的環境（第２図）

ここでは長畑遺跡群にて確認された、弥生時代と中世の周辺遺跡について記述する。

弥生時代前期の遺跡として古くから著名であったのが、苅田町葛川遺跡である。ここでは貯蔵穴を取り囲む楕円形の環壕が見つかり、その学術的嚆矢として知られる。弥生時代前期後半以降、苅田町や隣接する行橋市では集落の成立、拡散が顕著になる。中でも行橋市の下稗田遺跡や前田山遺跡は、円形竪穴建物と円形貯蔵穴によって構成される集落遺跡の典型例として知られ、また当該地域の土器編年の基準資料として用いられている。

弥生時代中期では先述の下稗田、前田山両遺跡の他、苅田町では法正寺木ノ坪遺跡があり、ここからは丹塗磨研土器がまとまって出土している。これら以外には中期の遺跡は比較的少ない。弥生時代後期の遺跡もそれ程多くはなく、町内では法正寺木ノ坪遺跡、山口遺跡、神田遺跡、近衛ヶ丘遺跡などがある。長畑遺跡群周辺では、あまり調査事例がないものの、分布調査で弥生時代から古墳時代の遺物が採集されていることから、この付近一帯には当該期の遺跡が展開することが予想される。

中世、この付近一帯は宇佐弥勒寺領苅田庄や宇原庄があったことが文献によって知られている。長畑遺跡群から若干離れるが、近隣には古代～中世の五輪塔や板碑が残る鳴光石塔群、鎌倉期の石塔群である平清経塚、発掘調査によって古墳時代から鎌倉時代の遺構が確認された二又遺跡等があり、やはり付近には古代から中世の集落遺跡や墓地が展開しているものと思われる。

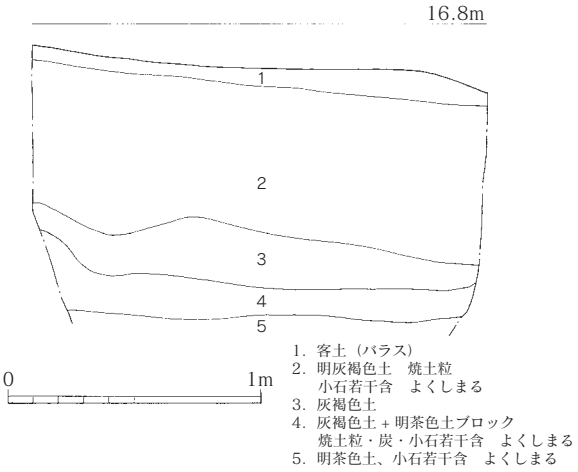
第２図　周辺遺跡分布図(1/25,000)

Ⅲ　発掘調査の記録

1　遺跡の概要

長畑遺跡群Ⅱ地区は京都郡苅田町大字提2885-1に所在する。調査対象地の面積は407.41㎡で、そのうち257㎡の発掘調査を実施した。

調査範囲は道路の拡幅に伴うため北西－南東方向に長い形状を呈し、長軸約27m、短軸約19mを測る。遺構面の標高は北端で16.2m、中央付近で16.5m、南端で16.5mを計測し、北側が若干低い。遺構密度は低いが遺跡全体に遺構が分布する。



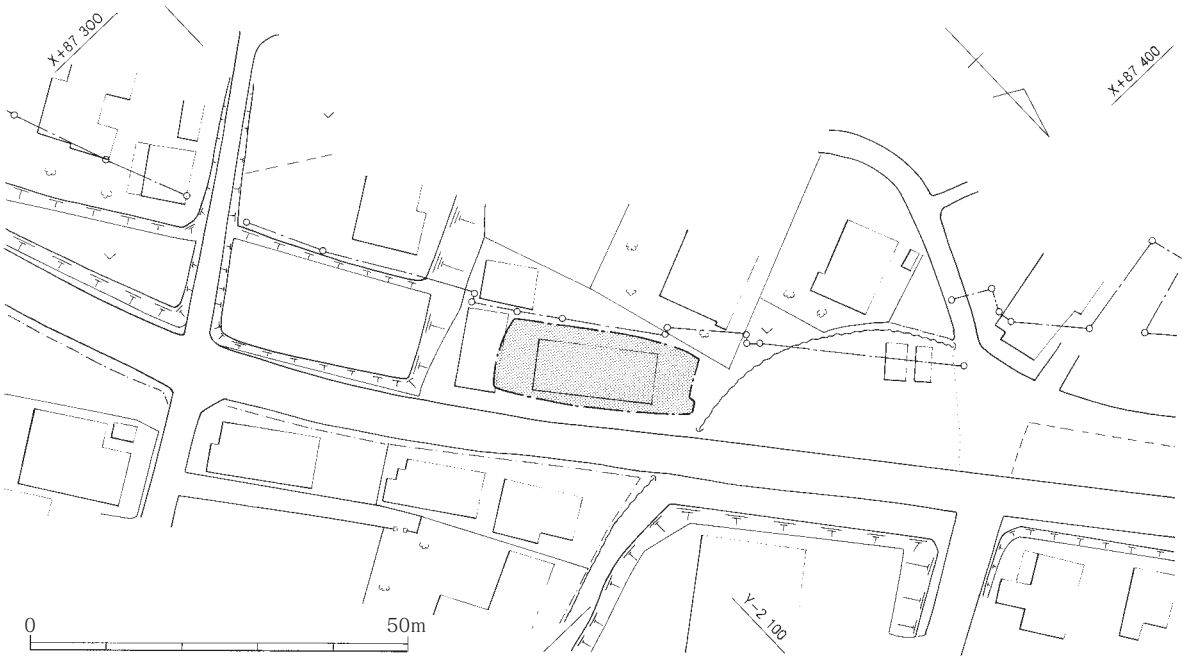
第３図　基本土層図(1/30)

検出した主な遺構は、竪穴１基、土坑４基である。他に暗褐色土単一層からなる浅い溝状遺構や、風倒木痕と思われる不整形の浅い土坑、ピット等を検出した。

出土した遺物の量はパンケースで１箱である。

2　基本層序（図版1、第３図）

第３図は調査区北東端に設定した基本土層図である。地表面には後世の造成時に敷かれたバラスが５㎝程の厚さで堆積し、その下層には60㎝程の厚さで明灰褐色土が堆積する。この層には小石や焼土粒が含まれ、粘性が高くよく締まっている。その下層に堆積する第３層は第２層と同質の灰褐色土である。第４層は第３層に明茶色土ブロックを含む層で、やはり小石や焼土粒、炭を若干含み、よく締まった層である。第５層は明茶色土で小石を若干含み、よく締まっ



第４図　調査区位置図(1/1,000)

た層である。第５層上面にて遺構を検出したため、この層を遺構面として検出作業を行った。

３　遺構と遺物

竪穴

１号竪穴（図版１・２、第６図）

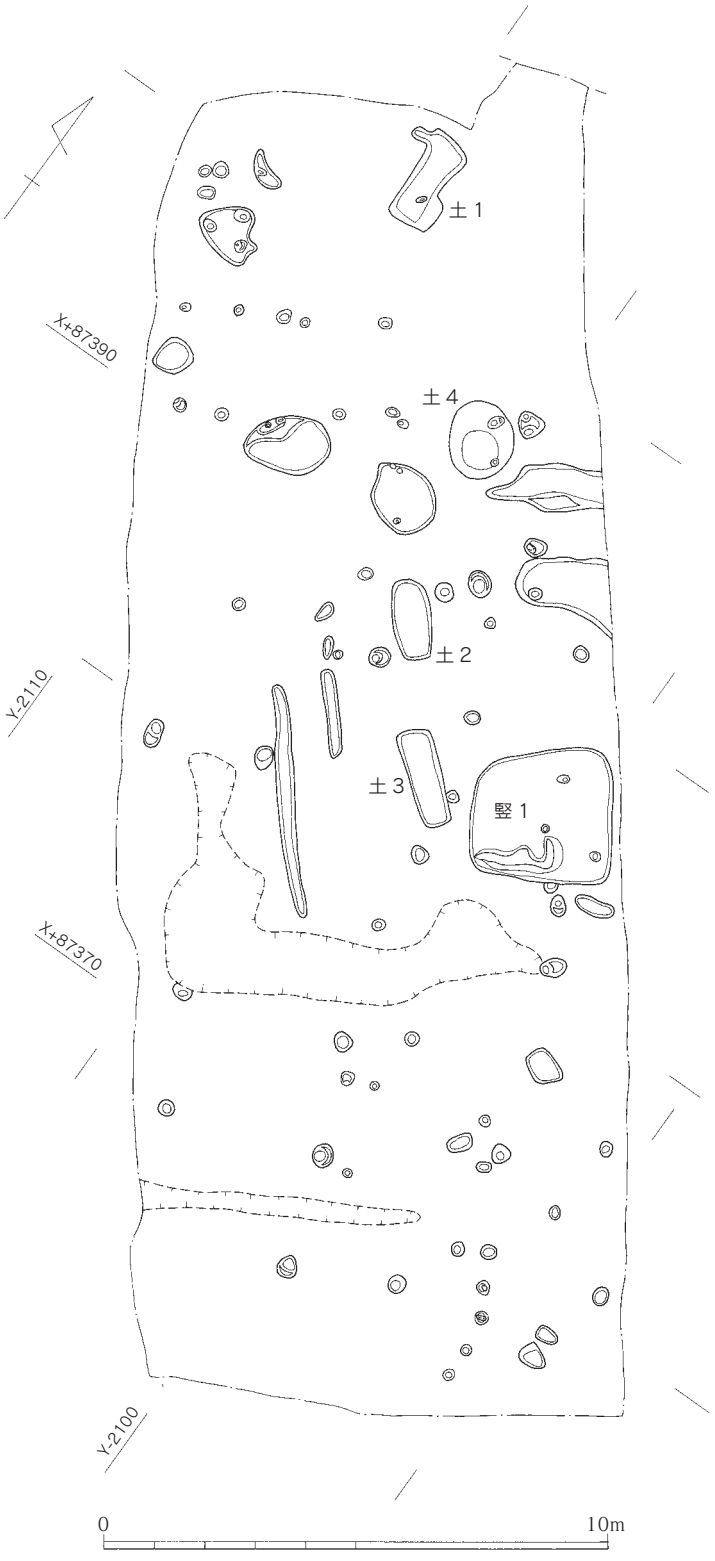
調査区中央付近の東側にて検出した遺構である。2.5m×2.8mの方形プランで、遺構確認段階で南壁際に焼土が検出されたため、竪穴建物の可能性を想定して調査を進めたが、調査の結果、出土遺物から中世の遺構であることが判明した。覆土は暗灰褐色土である。深さは２～10㎝と浅い。床面はほぼ水平で、床面上では３つの小型のピットを検出した。

床面上の南東から南隅にかけて焼土塊が広がっており、その周辺には広い範囲で焼土が確認された。

遺物は図示したものの他、土師器皿や青磁小片がビニール袋１袋出土した。

出土遺物（図版４、第８図１～４）

１・２は底部糸切りの土師器小皿である。１は底径6.0㎝。胎土に長石、赤褐色粒を若干含み、色調は茶灰色を呈す。２は口径9.2㎝、底径6.2㎝、器高1.3㎝。胎土に砂粒をほとんど含まず色調は茶灰色を呈す。

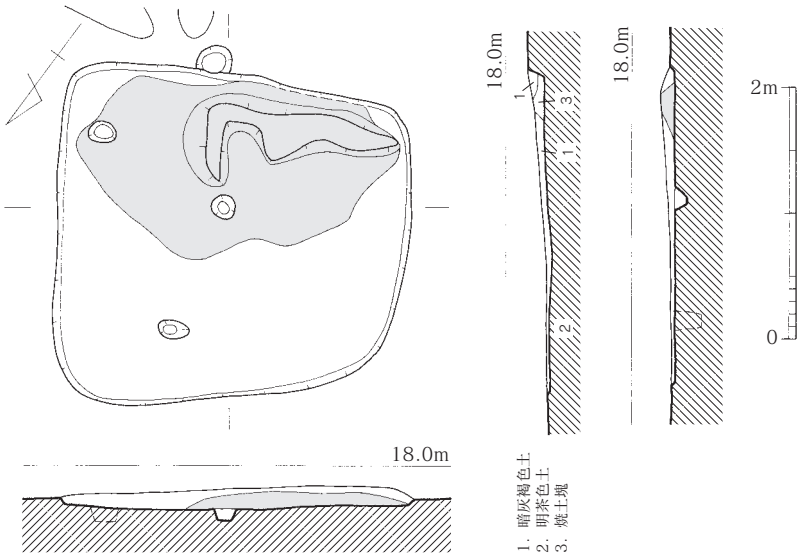


第５図　長畑遺跡群Ⅱ地区　遺構配置図(1/150)

３は土師器皿の口縁部片である。口径13.6㎝。胎土に砂粒をほとんど含まず、色調は茶灰色を呈す。

４は土師質鍋の口縁部片である。口縁端部を外側に折り曲げて肥厚させ、内面には稜を有す。

調整はナデ調整だが体部外面には指圧痕が残る。胎土に石英、長石粗砂を若干含み、色調は暗茶灰色を呈す。



第６図　１号竪穴実測図(1/60)

土坑

１号土坑（図版２、第７図）

調査区北側で検出した土坑である。南北に長い長方形を呈し、長軸230㎝、短軸80㎝、深さ10㎝を測る。覆土は焼土や炭を若干含んだ灰褐色土層の単一層からなる。床面は南から北に向かって若干傾斜している。床面上の南側では１つの小ピットを検出した。深さは10㎝程度に過ぎない。

遺物は図示したものの他、土師器小片が数点出土している。

出土遺物（図版４、第８図）

５は土師器甕の口縁部片である。外側に向けて強く外反し、端部の器壁は薄くなる。胎土に石英、長石、雲母の粗砂粒を多く含み、明茶褐色を呈す。

２号土坑（図版２、第７図）

調査区中央付近で検出した楕円形の土坑である。長軸を北西－南東方向にとり、長軸162㎝、短軸80㎝を測る。床面はほぼ水平で、深さは10㎝に満たない。覆土は炭粒を若干含んだ暗灰褐色土でよく締まっている。

遺物は図示したものの他、土師器小皿片、土師質鍋片等がビニール袋１袋出土した。

出土遺物（図版４、第８図）

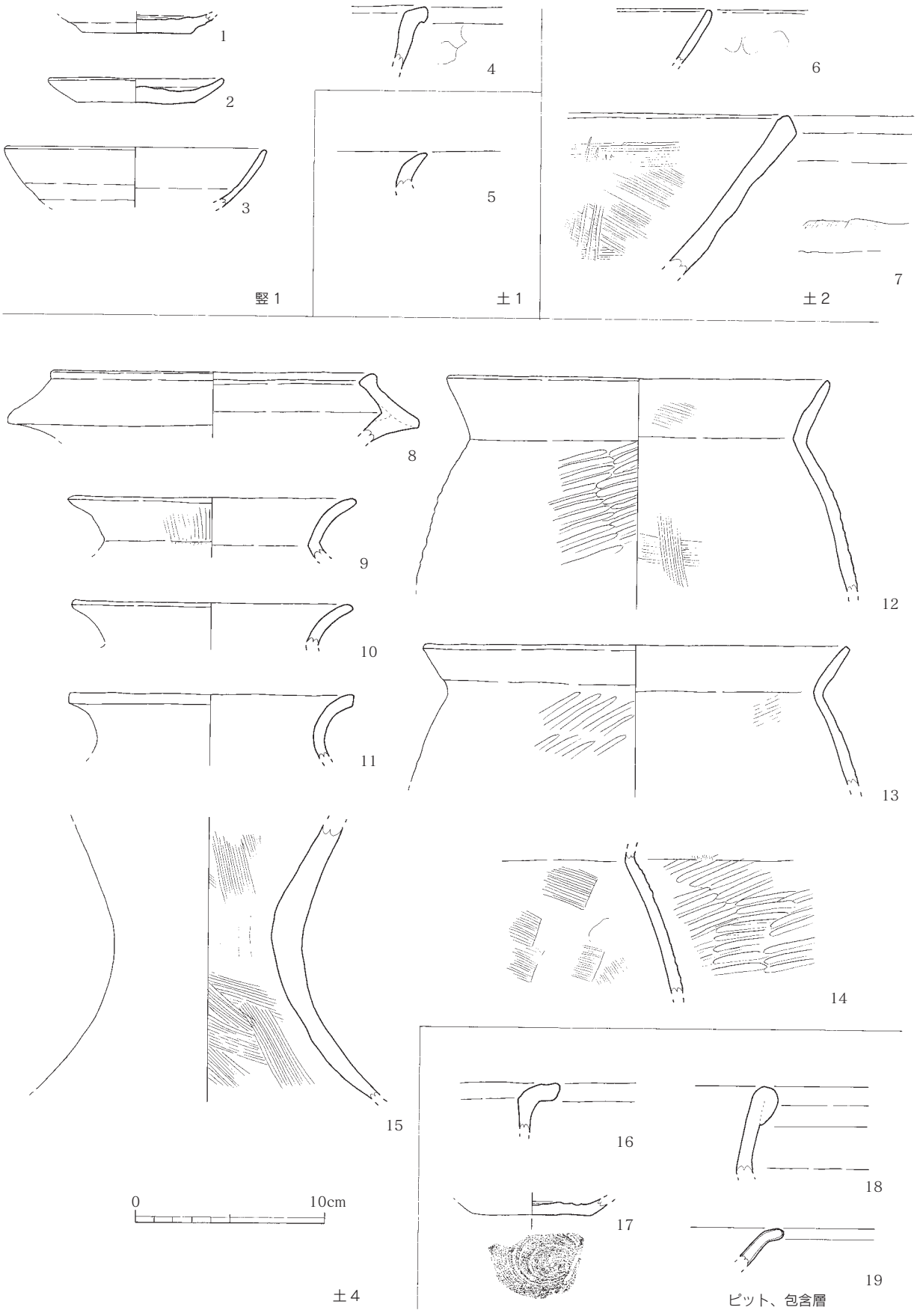
６は瓦器椀の口縁部片である。外面には指圧痕が残り、色調は灰白色～灰色を呈す。

７は瓦質擂鉢の口縁部片である。口縁端部は断面方形状に仕上げ、端部は丸みを帯びる。内面はハケ目後に４本の擂目が認められるが、破片であるために本来の本数は判らない。口縁部及び外面はナデ調整を行い、外面には先行するハケ目が一部に見られる。胎土は石英、長石の細砂を若干含む。色調は黒灰色～灰色を呈し、断面を観察すると器壁の内側は黒色を呈している。

３号土坑（図版３、第７図）

調査区中央付近、１号竪穴の西側で検出した長方形に近い形状の土坑である。長軸を北西－南東方向にとり、２号土坑と主軸方向をほぼ同じくする。長軸200㎝、短軸73㎝、床面は北側に向かって若干傾斜しており、深さは10㎝。覆土は灰褐色土の単一層である。

第7図　土坑実測図(1/30)



第8図　出土遺物実測図(1/3)

遺物は全く出土しなかった。

４号土坑（図版３、第７図）

調査区北半部で検出した楕円形の土坑である。長軸156㎝、短軸122㎝を測る。壁面は緩やかに傾斜しており、底面は土坑の東側に寄った位置にある。底面までの深さは40㎝を測る。壁面では２つの小ピットを検出した。どちらも深さは20㎝に満たない。

遺物は図示したものの他、弥生土器破片がビニール袋１袋出土した。

出土遺物（図版４、第８図）

８は複合口縁壺の口縁部片である。屈曲部から上半は直線的に強く内傾しており、端部は内外につまみ出している。調整は内外面横ナデを行う。胎土に石英、長石粗砂を多く含み、茶褐色を呈す。口径21.5㎝。

９～14は甕である。９は屈曲部が稜を有し、口縁部は緩やかに外反する。端部は丸く仕上げる。調整は内外面とも横ナデを行い、外面には先行する縦ハケ目が残る。口径15.0㎝。胎土に石英、長石、赤褐色粒を多く含み、明茶褐色を呈す。10は恐らく９と同一個体である。11は体部と口縁部の境が稜をなさず、緩やかに湾曲している。口縁部は丸く外反し、端部は面をなす。調整は内外面とも横ナデ。胎土に石英、長石、角閃石細砂を含み暗茶褐色を呈す。二次被熱のために変色しており、色調は暗茶褐色を呈す。12は肩の張らない体部から、直線的に開く口縁部へと至る器形の甕で、屈曲部には不明瞭な稜を有す。体部内面はハケ目、外面は右上がりのタタキ､口縁部は横ナデ調整で内面には先行するハケ目が見られる。口径20.0㎝。胎土に石英、長石の粗砂を若干含み、色調は灰黄褐色を呈す。13もやはり肩の張らない器形となり、口縁部との境は不明瞭な稜を有す。口縁端部はシャープな面をなす。体部内面はハケ目、外面は右上がりのタタキ、口縁部は内外面とも横ナデ調整を行う。胎土に石英、長石、角閃石の粗砂を若干含み、色調は黄灰色を呈し一部黒変する。口径22.3㎝。14は体部の破片で、調整その他から12と同一個体と思われる。内面ハケ目、外面右上がりのタタキ。

15は器台である。内面にはハケ目調整が残るが、外面は風化のため調整不明。胎土に石英、長石、赤褐色粒を多く含み、赤褐色を呈す。二次被熱が顕著である。

その他の出土遺物（図版４、第８図）

16はＰ12から出土した弥生土器甕口縁部片である。口縁部は短く外反し、端部はわずかに上方につまみ上げている。調整は内外面とも横ナデ。胎土に石英、赤褐色粒を含み色調は灰黄褐色を呈す。

17は包含層から出土した土師器小皿である。底径6.2㎝。胎土に微砂を若干含み色調は暗黄灰色を呈す。

18はＰ16から出土した備前焼の甕口縁部片である。頸部は直立し、口縁端部を外側に丸く肥厚させる。

19は同じくＰ16から出土した青磁碗の口縁部片である。器壁は薄く､釉は薄緑色に発色する。貫入が多い。

Ⅳ　まとめ

今回報告を行った長畑遺跡群は、調査範囲が狭小であった上に遺跡の性格を知るための十分な内容にも恵まれず、また周辺域の調査も進んでいないため、成果として挙げうる内容は多くない。

弥生時代の遺構としては、４号土坑が唯一である。土坑の形状や出土遺物が破片資料ばかりであることを考えると、廃棄土坑等の用途に使用されたものと思われる。出土遺物は弥生時代後期後半に位置付けられる。恐らく当該期の集落遺跡が周辺に広がっているものと思われるが、今後の調査の進展を待ちたい。

他の遺構、遺物は多くが中世に属するものである。１号竪穴は焼土塊の存在から焚火行為を行った事は疑いないが、遺構の性格を判断するまでの材料には至っていない。１～３号土坑は比較的形状の整ったものであり、平面形だけ見ると土壙墓のようにも見えるが、副葬品の存在が皆無であるため判断できない。遺物の時期は中世前期のものである。１号土坑から出土した甕は小片だが、古墳時代から古代の甕口縁部のようであり、この土坑の時期もその頃に比定したい。但し当該期の遺物は他には全く出土していない。２号土坑は瓦器碗と瓦質擂鉢の存在から中世前期に属するものである。包含層やピットから出土した遺物のうち、備前焼の甕や貫入の入った青磁などは中世でも後期に属するものであり、中世でも時期幅があることが判る。

今回の調査成果は僅かではあるものの、ほとんど発掘調査が行われていなかった当地域の歴史解明に一助ともなれば幸いである。今後の調査の進展に期待したい。

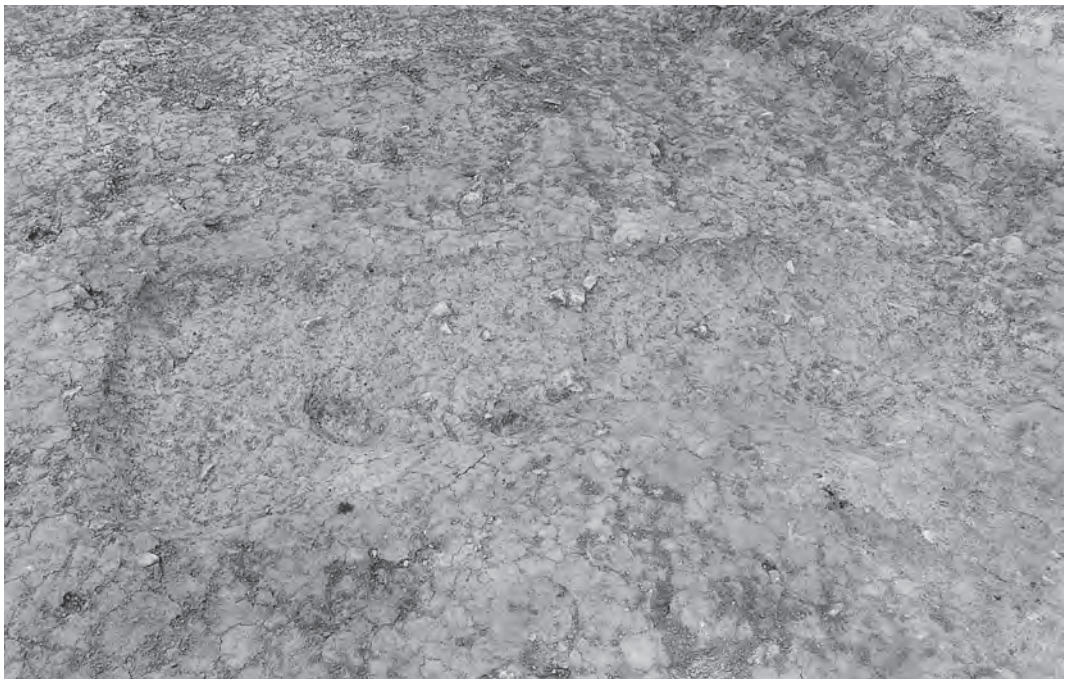
図　　版

1．長畑遺跡群Ⅱ地区
全景（北から）

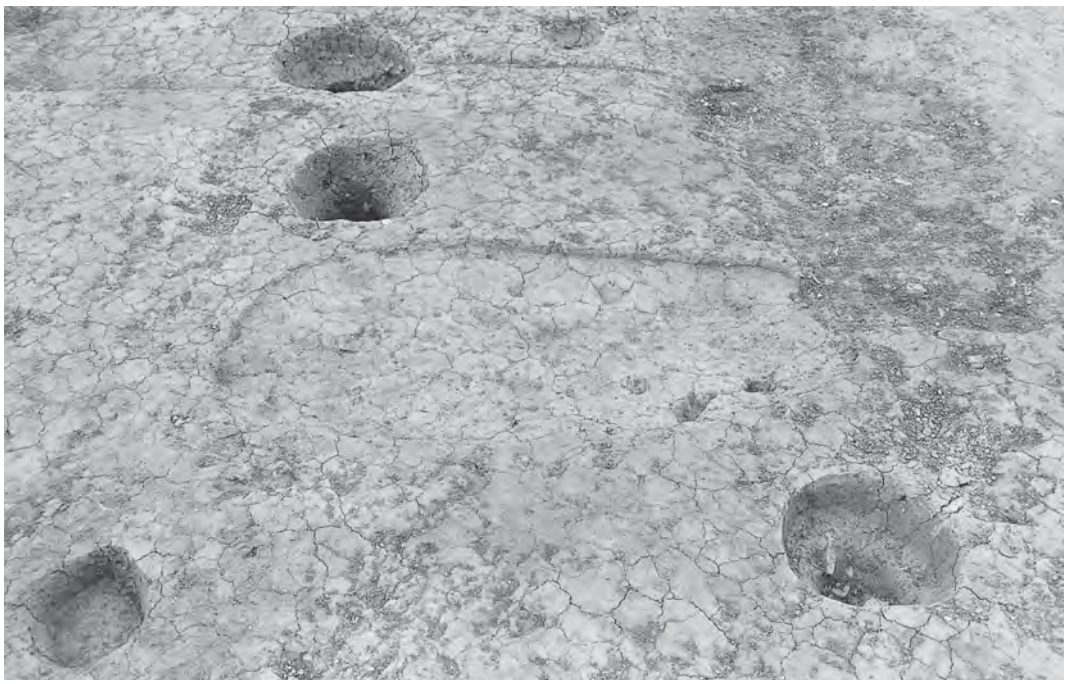
2．基本土層（南から）

3．1号竪穴（北から）

1．1号竪穴焼土検出状況
（北から）

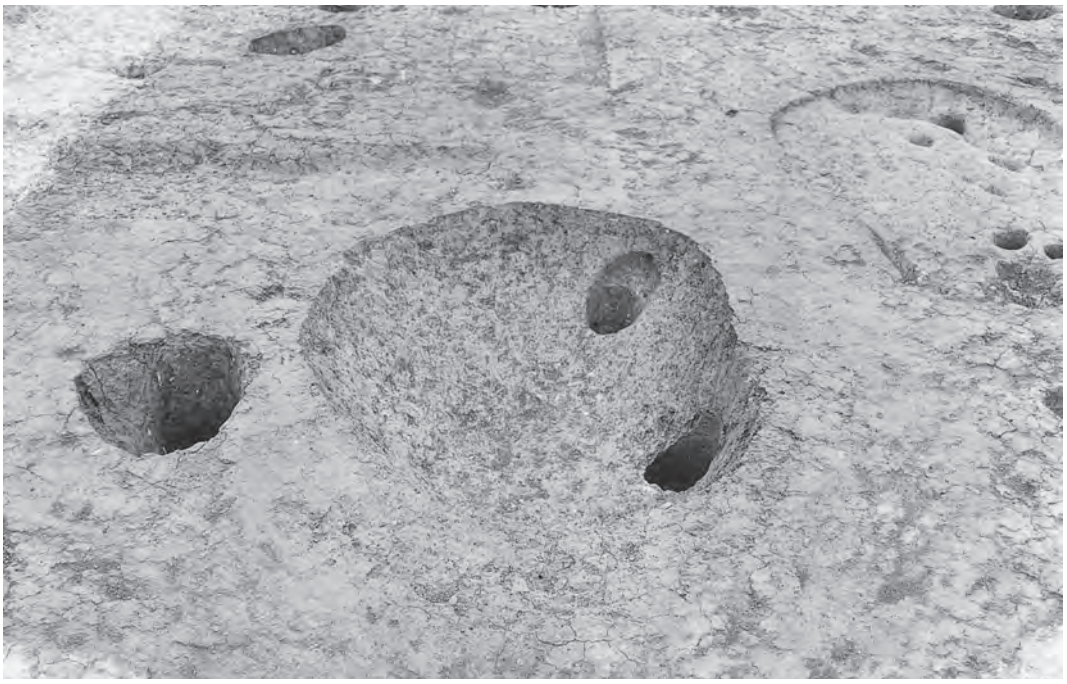


2．1号土坑（東から）



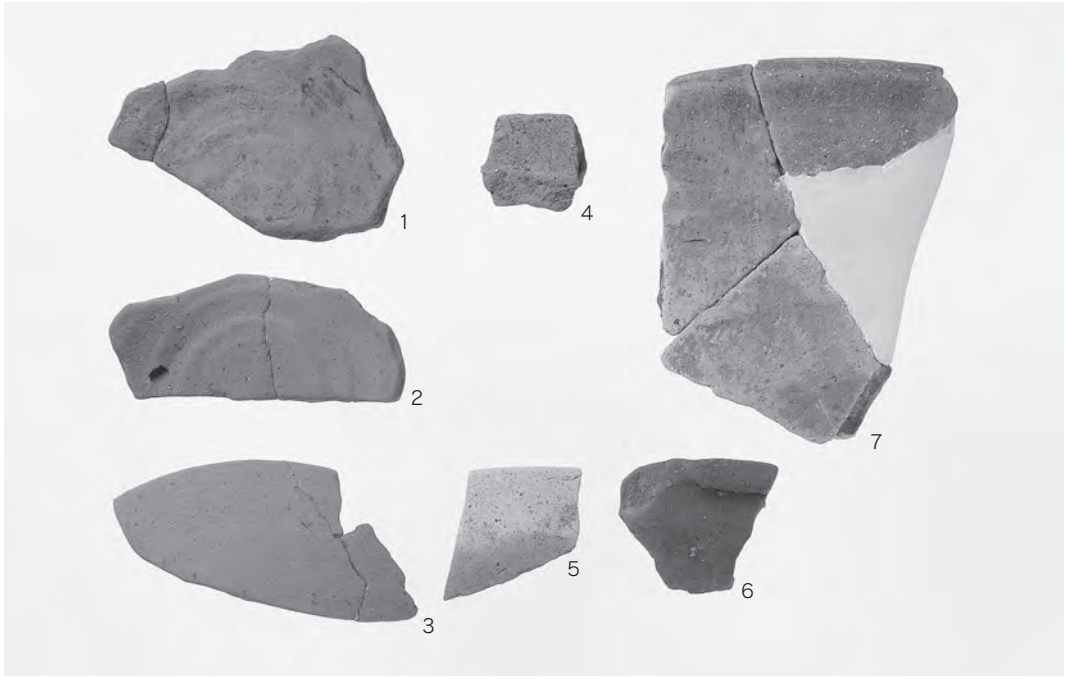
3．2号土坑（西から）

1．3号土坑（東から）

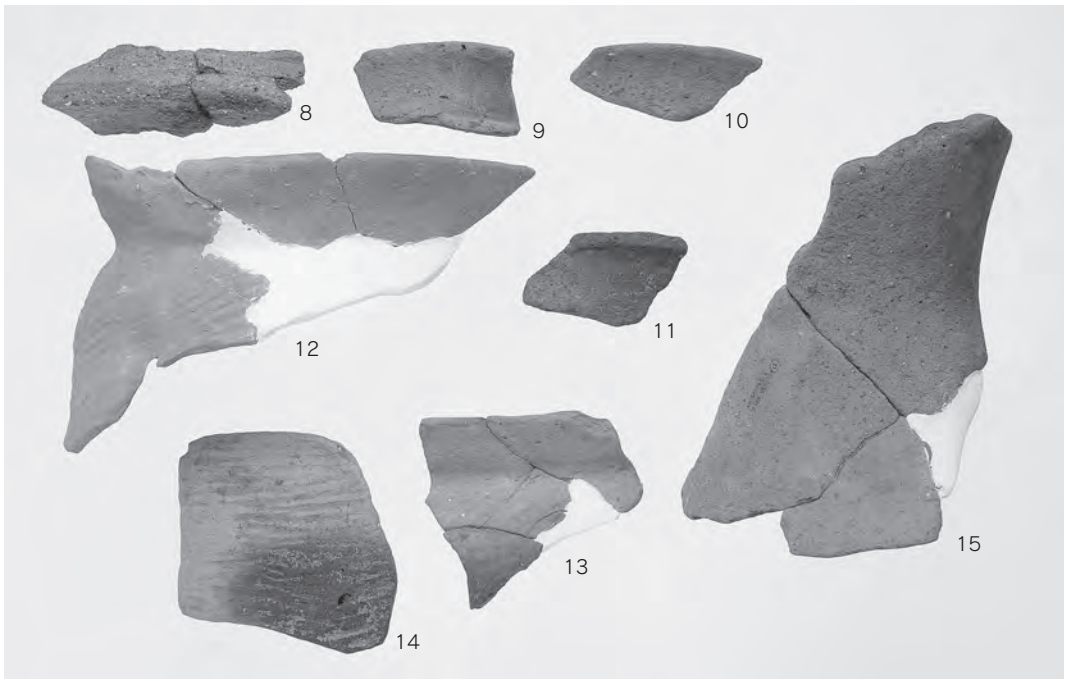


2．4号土坑（北から）

図版4



1．出土遺物①



2．出土遺物②

3．出土遺物③

報告書抄録

ふりがな	ながはたいせきぐんにちく
書名	長畑遺跡群Ⅱ地区
副書名	県道須磨園南原曽根線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第246集
編著者名	吉田東明
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3
発行年月日	2014年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
ながはたいせきぐんにちく 長畑遺跡群Ⅱ地区	みやこぐんかんだまちおおあざひさげ 福岡県京都郡苅田町大字提2885-1	40621		33° 47′ 30″	130° 58′ 28″	2005.06.06 ～ 2005.06.13	257	道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長畑遺跡群Ⅱ地区	集落跡	弥生時代 中世	竪穴・土坑	弥生土器・土師器・陶磁器	

遺跡の概要

緩斜面裾部に立地する遺跡。弥生時代後期の土坑、中世の竪穴及び土坑が検出された。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 0012

県道須磨園南原曽根線道路改良事業関係埋蔵文化財調査報告

長畑遺跡群Ⅱ地区

福岡県文化財調査報告書　第246集

平成26年３月31日

発　行　九州歴史資料館
〒838-0106　福岡県小郡市三沢5208-3

印　刷　株式会社　三光
〒812-0015　福岡市博多区山王1丁目14-4